

次元を超えることすらできないかもしれない

なすきゅうり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャドバのウィッチっぽい主人公が頑張る小説…かもしれない。
17/02/03 マリアナ↓マナリアに修正。

◇警告◇

・なす（作者）は比較的Fateにわかです。Fate/GOを1&2話投稿の日（2017/01/07）に始めました。

・なすはシャドバをやっていますが、

アグロネクロ↑今コレ

伝令サタンドラゴン

超越ウィッチ

骸ネクロ

ドロシーウィッチ

ミッドレンジネフティス

これらのデツキしか持ってません。あとフレンドは募集してません。

・また、なすは粗製AC乗りでもあります。

・タグや警告の要素が苦手な方は『ctrl+W』キーを押すか、画面を叩き割って下さい。

・そういえばマナリア魔法学院組って『神撃のバハムート』からの出張だった…なす、バハムートやってない…(´・ω・｀)

・騙して悪いが見切り発車なんで…投稿には期待しないでもらお

う
か。

目次

ぷろろろぐ！

転生なんてなかったのかもしれない | 1

時間は割と簡単に消し飛ぶのかもしれない | 5

この話は蛇足なのかもしれない | 11

ぷろろろぐ！

転生なんてなかったのかもしれない

吾輩は転生者である。名前はまだ無い。

第二の人生を歩み始めて早二年、恵まれた環境の中ですくすくと育っている。

ここで簡単にだが、私の転生の経緯を話そう。参考になれば幸い。

(神、)「君、転生したい？」

(私、)「No thanks.」

(神、)「拒否権はない。って事でf a t eに(・ω・)出荷よー」

(私、)「(・ω・)そんなー」

(神、)「一応特典はつけとくから、じゃあ、頑張ってねー！」

：実に勝手に理不尽な話だろう？参考になればとは言ったが、実際に参考になってもらいたくはないな。(か神、)じゃなければ今頃主任砲的になっていただろうな。

それで私の身など顧みてくれない方々は私の特典が気になるだろう？前世の私なら間違いなく顧みなかったのだから仕方が無いか。

私の能力は『超越』。『次元の超越』が正しい名称だった気もするが気にははいけない。分かる人にはどういうモノか分かると思う。あのコスト18スプー持ちの某スペルみたいなものだと思っただけ。分からない人はレポートのすごい版だと思ってくれば十分だ。というかレポート以外の用途であまり使いたくない。

さて、今話すべき事は粗方話した筈であるから、少々時を飛ばすかね。

では、キングクリムゾン。

—キングクリムゾン、時は消し飛ばされた。

やあ、吾輩である。名前は付いた。ドロシー・マナリアだそうだな。完全にシヤ○バ関連だな。

今更ではあるが私は女である。口調は紳士風であるが立派な女性である。そのの所は勘違いしないで貰いたい。喋れば多少はそれっぽくなるのだから。

それと私の生まれたマナリア家は階級はそうでもないが貴族であるらしい。ニート願望があるなら充分な環境だな。それと魔術師の系譜でもあるらしい。f a t e / 要素がようやく出てきた部分である。

さて、彼此^{かれこれ}長い年月が過ぎ、今の私は齡^{よわい}九になっている。日本なら小学3年生だな。私は学校ではなく家庭教師に教えられているが、正直言つて殆ど前世でやった事の復習でつまらない。日の出ているうちは普通の勉強だが、日が落ちると魔術の勉強に入る。

通常、魔術師の家は第一男子に最も力を入れて教育するものだ。我が家では私の3つ違いの弟、レヴィがそれに当たる。しかし我が家の場合、第一男子の他にもう1人、力を入れて育てる様だ。第一男子と競わさせて第一男子の能力を伸ばしたり、もしもの際に保険とする為らしい。これが私だな。

少し私の話をしよう。私の魔術回路は35本。原作の遠坂凜が4

0本、平均点な魔術師が20本なのを考えると破格の数だろう。マナリア家がそう年月を重ねた魔術の家でない事も考慮に入れて欲しい。その上私には『超越』がある。(神、かみ)の言う事が正しく、数度行つた実験も踏まえるなら、この『超越』はテレポートに留まらず様々な効果を齎す事が出来る。例えば、時間旅行。タイムトラベル例えば、限界突破。オーバードライブこれらがリスク無しで発動出来るのだ。つまりどういう事かと言うと、下手に『超越』使うと封印指定待った無し、という事である。

将来設計をする上で少々重荷となってしまうこの『超越』だが、問題は無い。要の所、使わなければバレないのだからな。しかしそうなるこの fate^{血なまぐさい}の世界で生き延びるには力不足だ。つまるところ成人辺りまでに自衛能力位は持つておかねば。

将来設計で思い出したが、私は女だ。そしてこの家は貴族だ。察しがいい方ならお気づきだろう、つまり政略結婚の未来である。

マナリア家は決して大きい家ではない。両親は家の大きさを気にするタチでは無いのが幸いだが、言い方は悪いが弱小貴族の我が家は一つ間違えればあつという間に御家断絶なんて事もありえなくは無。両親には2度目の人生を貰った恩があるのでもしそんな事家存続の為の結婚が起きるのなら甘んじて受け入れようと思う。本来無い筈の命なのだからそうしたつてバチは当たらないだろう。

「ねえ様、何をしていますのですか？」

「レヴィか、今私は日記のようなものを付けている所。」

日本語で書いているのだがな。

「日記かー、僕も書いてみたいー!」

「そう…父上ならば日記帳くらい幾つでも持っているかもね。貰つて来たらどう? 筆記具は私のを使えば良いし。」

「そうするー!」

「そう言つて父の書齋に走っていくレヴィ。いやはや、弟は目に入れても痛くない程可愛いですな。」

さて、こそつと今書いている日記：ではなく私の原作知識を書き留めたりするノートを『超越』の応用で作った空間に仕舞い、代わりに本当の日記帳を取り出す。

さらさらと日付、天候、そして本日のとりとめのない平和で幸福な日常について書き連ねる。それと並行し、レヴィの分の筆記具も用意しておく。

「ねえ様、貰ってきたよ！」

「おかえり、もう筆記具は準備してあるからこつちにおいで。」
「うん！」

…弟が可愛すぎて鼻から愛が漏れそう。

「それでねえ様、日記つてなにを書けばいいの？」

「その日起こった事を、後から読み返して分かるように書くの。とりあえず今日の日付と天気を書いてみて。」

「わかった！……書けたよ！」

「そうしたら今日の出来事を後で読めるように書くの。」

「…よくわかんない！」

「じゃあ、今日は私を見ながら自分の言葉にして書いてみて。」

「わかった！」

こんな風に、私と弟の平和な日々がまた一つ、過ぎ去って行くのであった。

願わくば、ずっとこんなに平和で幸福な日常であってほしいと思わずにはいられない。

時間は割と簡単に消し飛ぶのかもしれない

吾輩は転生者である。名前はドロシー。

『超越』などという能力チカラを持つだけのただの魔術師見習いである。

年齢は今年で十二。最近シスコンを拗らせ始めた弟が一人いる。

今は訳あって時計塔に在席し、立派な魔術師に至らんと勉強している。魔術師の時点で立派もクソもありはしないのは言わないお約束である。

比較的得意とする魔術はルーン魔術と錬金術、あと魔術回路の効率的運用のサークルっぽいものにも所属している。いかにもウイツらしい内容達は、実際楽しい。これまでの私の主な実績は、採掘に便利な貫通力と精密性の高いルーンの開発、氷を素材としたゴーレムの開発、魔術回路の一部だけを起こしたり切ったりして余計な魔力を使わないようにする技法の発明、等々…。

ああ、そういえば原作の前日譚である fate / zero のキャラのケイネス、ウェイバー、ソラウなんかとも関わる事が出来た。ケイネス先生は、そこまで年月が重ねられていない家の私がこれ程の魔術回路を持つことを評価していた。ウェイバーとは魔術師でありながら電子機器を使う事に抵抗がない者同士、あっさり打ち解けた。ソラウさんは、まあ二言三言会話したくらいかね。

さて、少々長く前置きを置いたが、本題はここからだ。

今私は右腕に…と言うより右手の甲に包帯を巻いている。親やサークル仲間にはルーン魔術でミスして火傷したと説明しているが、察しの良い読者様なら包帯の下に何があるかは分かるだろう。そう、令呪だ。何故かは分からないが汚染済み聖杯に願望があると判断されたようなのだ。

それだけならまあどうにかできない事も無い。『超越』が全力稼働するだけで住む筈だ。が、しかしそれに時間等が待ったをかける。今は1991年、そして原作の fate / stay night の第五

次聖杯戦争は確か2004年の話だった筈だ。流石の聖杯でも13年前から令呪の配布などしないだろう。

そこで、先程の話を蒸し返そう。fate/zeroの話だ。これはfate/stay nightの10年前、第四次聖杯戦争を描く、本編stay nightの前日譚なのだ。が、2004年の10年前、つまり1994年は今から3年後の事なのである。恐らく今回私が呼ばれた聖杯戦争は第四次聖杯戦争だろう。

第四次聖杯戦争：fate/zeroといえば、本編stay night以上に凶悪なグロテスク表現や7陣営の過半数に救いのない鬱な展開、大量に人が死んだりもする相当ヤバイ戦いな訳である。普通ならそんな戦争に巻き込まれるのは御免こうむる所だが、立ち回り方によつては一般人の大量死を防げるかもしれない。それにこの機を逃すと我が魂の祖国、極東の日の本の国、日本に行く機会が今後一切失われるかもしれないのだ。行かねば（使命感）。

という事で決断&即行動。今持てる人脈の全てを総動員し、来年度から日本の冬木の穂群原学園中等部に入学出来るように根回し。親には「極東の異文化でなら詰まり気味の私の魔術開発も伸びるかもしれない」みたいな感じに話したらあっさりOKが貰えた。ところがレヴィは行かないでほしいみたいな事言い出すので、「レヴィはお姉ちゃんのやりたいことを邪魔する悪い弟だったんだ」的な事言ったら引き下がってくれた。その日はずっとレヴィと一緒に居てあげた。

それから約半年、1992年の二月半ば。私は单身、日本へと降り立つのであった。

前世終了から約12年、ようやくこの地に舞い戻る事が出来た。過去の上平行世界だがな。

煩わしい手続きを終わらせて今空港を出た所だが、さあどうしようか。もう冬木に住居は購入してあるし家具等の搬入も終わってる。

入学準備とかはまだだが三月に入ってから始めても十分に間に合うだろう。：よし、観光だ。折角前世では持てなかった時間もお金もあるのだから。

そうと決まれば即行動。まずは家電とオタクの町秋葉原からだ！

—少女観光中—

ふー。あれもこれも観光してたら一週間もかかってしまった。まあ楽しかったから結果オーライではあるがな。

さて、今私は冬木に購入した一軒家で寛いでいる。観光疲れでこの家に辿り着いたはいいが荷解きの事を失念していたせいで『超越』を使うハメになってしまったのはここだけの話。

二階建てキッチントイレ風呂有り地下室屋根裏完備。新都方面へのアクセスも良く、一人暮らしにしては豪華過ぎる我が家。お手伝いさんも来るとはいえあまりにも広い。：随分と遠くまで来てしまったな。弟が可愛いくて可愛いくて仕方がなかったあの頃が懐かしい。

まあ感傷に浸るのも大概にしておかなければ。ご近所さんへの挨拶とか家の細かい装飾とか、やらなければならぬ事は山ほどあるのだ。

—キングクリムゾン、時は消し飛ばされた。

ぬっ、約二年半の中学生生活が丸々カットされた気がする。確かに原

作に関わるようなイベントは無かったがいくらなんでもこれはひどい。…まあいいか。

さて、今年1994年もいよいよ秋となってきた。時計塔の人脈とは未だに繋がっているため時計塔の聖杯戦争参加者について情報が上がっているが：ウェイバーとケイネス先生の参戦は確定。こちらで殺人鬼龍之介はとつちめてあり、令呪が無いことは確認済みの為、残りの参加者についても原作 zero と変わりはないだろう。

そこで少々考えねばならないのは召喚するサーヴァントについてだ。今の所私のアドバンテージは原作知識と『超越』しかない。私の参加は結構簡単にバレるだろうし、私自身の能力も『超越』を抜いて考えると低い。つまり原作知識（とはいえアニメ全話一回分程度しかないが）に沿わない展開作りはあまり好ましくないという事だ。

少々長く語ったが結局の所、キャスターを召喚する訳である。しかし私にはそ^{キャスター召喚の確定}れを行う為の触媒や詠唱を準備する余裕が無かった。コロコロ動く方のキャスターや魔女の出てくる絵本くらいしかないのだから実質無いのと同じである。

まあ気にはしてはいけ^{ご都合主義}ないのだろう。相補性の巨大なうねりとか円環の理み^{ご都合主義}たいなよく分からない何か^{ご都合主義}が問題ないと囁いてるじえ。

—夜—

脳内で魔術回路のスイッチ：私の場合シャ○バの災いの樹の門を開くイメージ：をONに。同時に全身にピリツと痛みが走るが、いくら端くれとはいえ流石に魔術師なのだからこの程度は慣れている。

今回は魔術回路の出し惜しみは必要ないのでイメージの門の開き具合は全開。時刻も私の力が最も高まる時まであと数分。これより

「サーヴァント、キャスター。召喚に応じ参上したわ。」

…どうやら（か）神（み）は皮肉が得意らしい。

「確認する必要はないと思うけど、貴方が私のマスターよね、私マスター？」
召喚されたのは似て非なる私。『次元の魔女ドロシー』そのもの
だったのだ。

ね。えらいえらい。」ナデナデ

「撫でるなあー！これでももう中学三年生なんだけど！」

「あらそう…残念ねえ。喜んでもらえると思ったのに。」

…召喚の魔力消費と合わさって頭痛くなってきた。

「おしやべりも程々にしない？私寝たいんだけど。」

「あーっと現在時刻は…3時!?そうね、寝ましょう。できれば一緒のお布団で。」

「…ちゃんと寝間着に着替えるなら別にどうぞ。ふああ。」

「なら先にお布団に行っておいて下さいな。私は最低限この家の要塞化をしておきますから。」

「そう、ならおやすみなさあ〜い。」

ふああ。しばらく学校はお休みするしこの夜型生活に体を戻しとかないとなー。

やあ、吾輩だ。寝て起きたらスッキリした。

結局キャスターは一緒の布団で寝たのだが…私の胸部装甲の無さに絶望したあ！君は万死に値する！（錯乱）

こほん…私の中3にもなつてAを突破しない胸の話はさておきだ、
ジェバンニが一晚でやってのけた我が家の要塞化について軽く触れ
ておこう。

魔術的には勿論、科学的にも幾重もの防御策が図られている今の我
が家は、探知魔術・ソナー・衛星の監視・etc…を全て無効化し、許
可者以外への強力な認識障害を持ち、侵入してきた輩には鉛弾と魔力
弾の雨をプレゼントする素晴らしい家となっている。家自体の強度
も上げられており、メンテナンスもろいろとコロニーレーザーだろうと
「私は帰ってきたー！」だろうとSLB星を軽くぶっ壊すだろうと耐えるそうだ。

どっからその魔力と機材を持つて来たのか問い正せば全て『超越』
で片付けられてしまった。この世界にとってのイレギュラーである
『超越』だろうと写し取るナーサリーライムはマスター依存のチート
である事が分かった瞬間である。

チートついでにどれほどの記憶を持っているのか聞いたら、全部
(原作知識も) だそうだ。ナーサリーライムとは小さな子供の描く夢
みたいなイメージがあつたけど、現在進行形で音を立ててイメージ像
が崩れている。

「これも全部『超越』って奴の仕業なんだ。」

「つまり私が悪い、自業自得ってこと!?!」

「過程を省いて結果だけ伝えるところなるわね。」

「絶対それ重要な過程を吹き飛ばしちやってるって!」

「まあまあ、良いじゃない別に。」

「…おかしいな、ついさつきスッキリした筈なのにもう頭痛くなつて
きたんだけど。」

「ドン☆マイ」

ちくせう。いつか絶対SEEKYOUしてやる。

「それで、マスター私。幾つかお話ししておきたい事が…。」

…キャスターが急にシリアスな空気を纏い始めた。合わせとこう。

「何かしら?」

「まず一つ、マスター保護用の礼装を作成しましたので着用してください。」

「了解。」

「二つ、この家の要塞化後、アサンシんらしき反応を検知しました。隠蔽は完璧でしたので気付かれてはいませんが、今後注意が必要かと。」

「もう居たのかアサンシん。」

「三つ、これはマスターの意思に委ねますが、ルーン魔術、私に訓練されてみます?」

「…うーん…考えとく。」

「ではまた余裕がある時にでも。」

「で、話したかったのはそれだけ?」

「ええはい。それだけですとも。って事で私、^{マスター}一緒に風呂入ろっ!」

「急に空気変えやがったなオイ。…別にいいけど我が家のお風呂の浴槽、1.5人分くらいの大きさしか無いんだけど。」

「そこはまあ、密着すればいいですし?」

「なぜ疑問形だし…まあいいや、もう好きにしちゃって。」

「やったー!」

「…本当にこのサーヴァントで大丈夫なんだろうか。」

—少女達入浴中—

お風呂上がり、キャスターから指輪、腕輪、ネックレスを貰った。さつき言っていた私の礼装だろうか?

「That's right. 指輪がルーニックスールドで腕輪が魔力タンク、ネックレスが指輪と腕輪の機能を半分くらいで両方持っているよ。」

「へー。とりあえず、^{地の文}心の声をさらっと読むのは辞めてね。」

「多分善処するわ。」

「そこは確定して欲しかったな。まあいいや、それでこれからどうしよつか？」

「それを私に聞く？ マスター 私が決めてよ。」

「そう、なら…：そうねえ…：初戦の倉庫街に色々設置しとこうかな。ついでに キャスター 貴女の服も買っちゃいますか？」

「いいねそれ、さんせー！」

「そうと決まれば即行動。お手伝いさん用の服があったはずだからとりあえず キャスター 貴女はそれ着といて。」

「りよーかい。」

――外出描写は消し飛び、家に帰ったという結果だけが残る！

「ただいま。」

…まあ誰も居ないんだけどさ。お手伝いさんには約二週間の暇を出したし。

で、外出の成果の事だけど、倉庫街にはきっちりとルーンを敷設完了。これで初戦のデータは魔術的にも科学的にも全て採ることが出来る。ルーン自体の隠蔽も完全。あとついでに聖堂協会の事後処理の人達が少しでも楽になるような仕掛けも仕込んでおいた。

キャスターの私服もキャスター自身がこれと決めた数着を購入。部屋着は魔力で適当に編むそうなのでこれで衣服面の心配は無し。そこで冷蔵庫の中身があまりないのを思い出したので急遽買い物をすることに。これで当面の食料も問題無し。

ああそういうえば、冬木にある方の協会に使い魔を使ってキャスター召喚を一応申告して置いた。まだザイド劇場も始まってないくらい早いけど、まあ一応ね。

「ああ、そういえば私^{マスター}？」

「ん？どった？」

「後で髪の毛の提供をお願いね。私^{マスター}の決戦用礼装の最終調整がした
いから。」

「おっけー。…念の為確認しておくけど、どんな礼装が出来上がるの
？」

そう聞くとキャスターは得意気に伊達メガネを取り出し、無意識で
はあるのだろうかドヤ顔で解説し始めた。

『超越のバトルドレス』。杖と衣装セットの礼装で、基本的に超越の
発動を補助する効果が有るわ。他に外付け魔術回路、魔力タンク、亜
空間倉庫、強化魔術外骨格、視界全方位化&視力超強化、フラックジャ
ケットの機能、不導体処理済み、緊急時はパラシユートに変形、あと
素材に私の開発したM^{マジカルナノケブラー}N^{マジカルナノケブラー}K^{マジカルナノケブラー}を使ってるから防弾性と魔術適合性を
両立してるわ。M^{マジカルナノケブラー}N^{マジカルナノケブラー}K^{マジカルナノケブラー}はケブラー繊維の弱点である斬撃、刺突に
も耐性を持たせた私の自慢の逸品ね。」

「なるほど、つまり現代でも神代でも早々作れない御伽噺の代物だ
と。」

「そゆこと。最終調整で私^{マスター}しか扱えないようにするから安心して使っ
てね。」

「そこまでにしとけよキャスター。」

「あら、私^{マスター}もルーン魔術カンストさせて『超越』使えばこれっぽい事
が生身で出来るわよ？」

「…キャスターのルーン魔術講座、受講しようかな…。」

「基本いつでもウェルカムだから気楽に受けちゃって♪」

「うん、その気になったら言うわ。…それはそうとして、もう眠いんだ
けど。」

「そう、じゃあおやすみね。私もやる事パッと済ませて一緒に寝る
から。」

「りよーかい。おやすみなさーい。」

「おやすみ、私^{マスター}。」

そうしてベッドに入ってしまったら、こそっとキャスターが入って来たので、ベッドだから出来るシリアスな話をしてみることにした。

「ねえ、キャスター。」

「どうかしましたか、マスター私？」

「キャスターは、もし聖杯を勝ち取ったら何を願うの？」

「…そうですねえ。…正直な所、私に聖杯に託すような願望なんてこれっぽっちも無いんですよええ。強いて言うなら、別のナーサリーライム私が彼女の写し身を探し出せるように手助けするって事ですかね。」

「…そう。」

「それがどうかしたんですか？」

「キャスターの事だし、私の言わんとしてる事くらい分かるでしょ？この性悪魔術師め。」

「はてさて、一体何ノコトデセウネ（棒）」

「棒読みが露骨すぎるって。…私に心からの願いが無いこと、分かってたんでしょ？」

「そりゃあ私から記憶を写してますからね、知らない筈が無いじゃないですか。でもこればかりは私の口から話してもらわないと…。」

マスター私 自身の問題ですし。」

「そう…よね…。」

「それともなんです、私にAUOの如く有難いお説教でもしろって言うんですか？」

「それは…そんな事無いけど…。」

「なら私がどうかするしかないんです。…大丈夫、聖杯に令呪を渡されたなら必ず願いはある筈なんです。それになんだかんだあつても私は若いんですから時間はいくらでもあります、少しづつでも見つけていけばいいんです。存外、聖杯に願望を聞いたら現れたのは巨大な地球そのものだった…なんて事もあるかもですよ。」

「そうか…そうだよね。何も焦る必要は無かったんだ。…ありがとう

キャスター。話したら楽になった。」

「^{マスター}私の役に立てたのなら幸いです。ささっ、もう寝てしまいまし
う。」

「うん、そうする。おやすみ、^私キャスター。」

「おやすみなさい、^{キャスター}私。」

こうしてちよびつとだけ絆の深まった私達キャスター陣営は、遂に
聖杯戦争に突入していくのであった。